東日本大震災からの復興と学会の役割

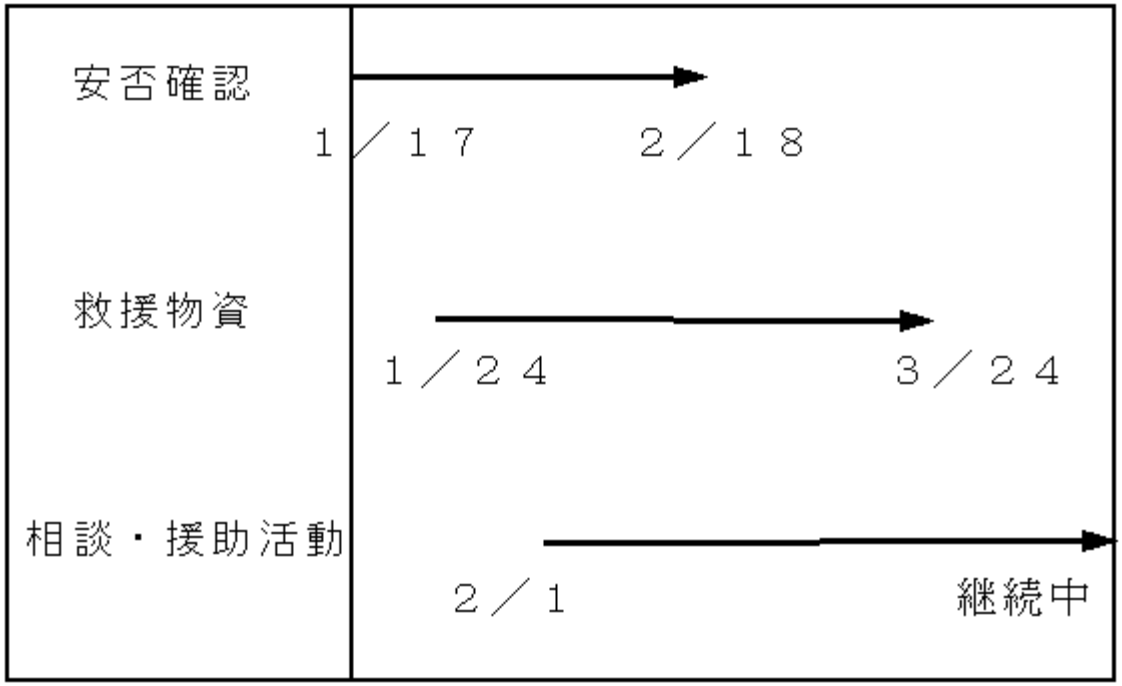
阪神･淡路大震災の復興経験と今後の学会の役割

近畿大学理工学部社会環境工学科
三星昭宏

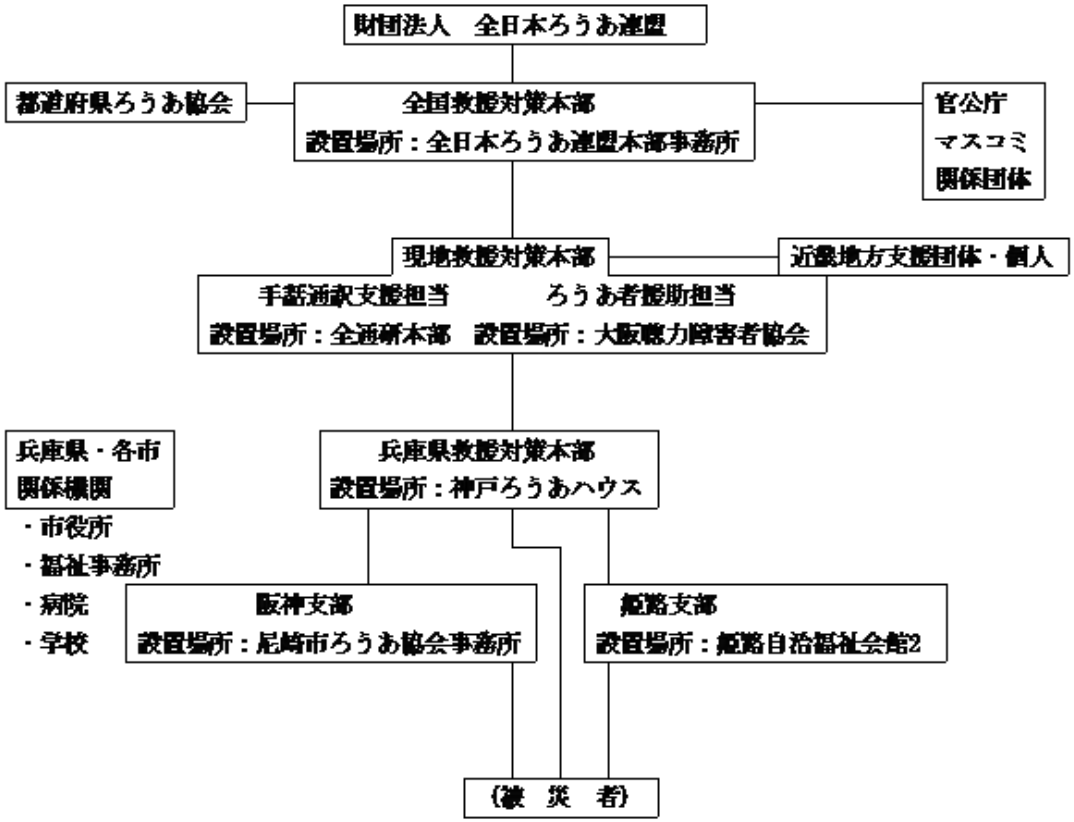
講演内容

1. 阪神・淡路大震災のときの高齢者・障害者等の被災・避難・安否確認・避難生活・復旧・復興
2. アメリカCARDの経験
3. 福祉のまちづくり学会の役割

阪神･淡路大震災での支援団体の活動内容と時期



阪神･淡路大震災時の聴覚障害者支援団体組織図



阪神･淡路大震災避難時の道路状況と避難時の困難

道路状況	肢体不自由者	車いす利用者の電車利用は介助者一人では困難
	視覚障害者	勝手の違い，足の感じ方の違い 陥没などで盲導犬も使えなく歩くのが不安
	聴覚障害者	バイク，自転車が多く危険
	共通	路面（凸凹，亀裂，地盤沈下） 塀，倒壊家屋，ガラスの飛散，液状化による段差 渋滞
避難時に困難・危険と感じた所	肢体不自由者	ガスの臭い． 自動車が多かった為，逃げづらかった
	視覚障害者	歩道上の車の乗り入れ等の道路の閉塞 重機等のエンジン音 車道に仮歩道があるとき 盲導犬を連れて歩いているときの犬のケガ 環境の変化
	聴覚障害者	情報の不足 給水の告知，広報車アナウンス
	共通	家屋・瓦礫・家具等の倒壊 道路（障害物［駅の自転車］，凸凹，電線）

阪神・淡路大震災での視覚障害者の各種交通手段の不満,問題点

	震災前の問題	震災後の問題	今後の整備要望
鉄道	列車種別の案内がない放送	人が多さによる乗降の困難	被災者のための無料での乗車
	聞きにくい車内放送	駅員の数	点字による区間ごとの値段表示
	各私鉄で購入すべき切符が分からない	駅の形の変化	ホーム転落防止用柵の設置
	ホームと電車の隙間	復旧まで利用が困難	階段の位置案内
	ホームが狭い		エレベーターの設置
	車内での乗客マナー		
	冷暖房の調節		
	運賃		
	途中で途切れた駅		
	ホーム内の点字ブ		
バス	停止位置	全く動かなかったバス	行き先アナウンスの明確化
	バス乗降口の探索	介助者なしでは利用が困難であった代替	
	バス停での行先放送	迂回を伴うバス停留所までのアクセス	
	車内アナウンスの遅	不規則なバス発着時	
	全然ないアナウンス	待ち時間の増加	
	運転手のマナー	目的地までの所用時間の増加	
タクシー	行先のわからない運転手	渋滞による移動時間の増加	時間外，緊急時にも使えるようなタクシーチケット
	福祉タクシーチケットの配布枚数		タクシーチケットの数の増加
	介助者なしでの移動		被災者への無料乗車
	車酔い		
自動車	車酔い	工事による道路状態の変化	渋滞緩和
	違法駐車，路上駐車	自動車や自転車の音の判別がつかない工	仮設住宅の駐車場設置
		路上駐車の増加	歩道上の自動車乗り上げ防護柵の設置
自転車	放置自転車	自転車利用者のマ	
	歩道上を走る自転車	歩道上を走る自転車	
歩行	点字ブロックのない道路	歩道整備の不備	歩道の街灯設置
	点字ブロック上に乗り上げる自転車，自	点字ブロックの破損	音声信号機設置の普及
	電柱に近接した点字ブロック	道路のひび割れ，ごみの不処理，放置自転車による歩行困難	避けにくい場所の改善
	柱に肩が当たってしまうような点字ブ	歩車道の区別が不明瞭な場所の増加	歩・車道間の段差設置
	歩道上の自転車の散乱	震災後にできた看板等による見通しの悪	点字ブロックの大きさ，厚さ等全国統一化
		歩道が整備されていないため，盲導犬が使用不可能	
		倒壊建物による道路閉塞	

東日本大震災の被災

1)健常者も含むまとまった被災調査としては、

（株）サーベイリサーチセンター

「宮城県沿岸部における被災地アンケート」

をあげておきます。多数の高齢者の被災ヒアリングがあります。

2)障害者の被災調査としては、

「点字毎日」の5/19,5/26などをあげておきます。

障害当事者(視覚障害者)の佐木理人記者の現地ルポです。

→これらは本学会関西支部、「東日本大震災勉強会(その2)」(2011.6.21、於大学コンソーシアム大阪)で報告されました。

当日資料を参考にして下さい

内容は当日。

■日本障害フォーラム(JDF)宮城支援センター

→公共施設の提供がなかなか得られない

→障害者支援やボランティア活動の拠点確保が課題

→企業のCSRとしての、空間提供が効果的？

(ヒアリングより)

支援組織

公的団体(健常者)-　市役所・役場

公的団体(福祉分野)-　障害福祉課、高齢福祉課

社会福祉協議会

当事者団体- 障害者、高齢者・・

地域社会-　自治会、老人会、趣味・学習会

NPO・支援組織-　福祉NPO、まちづくりNPO、・・

施設-　病院、障害者施設、高齢者施設

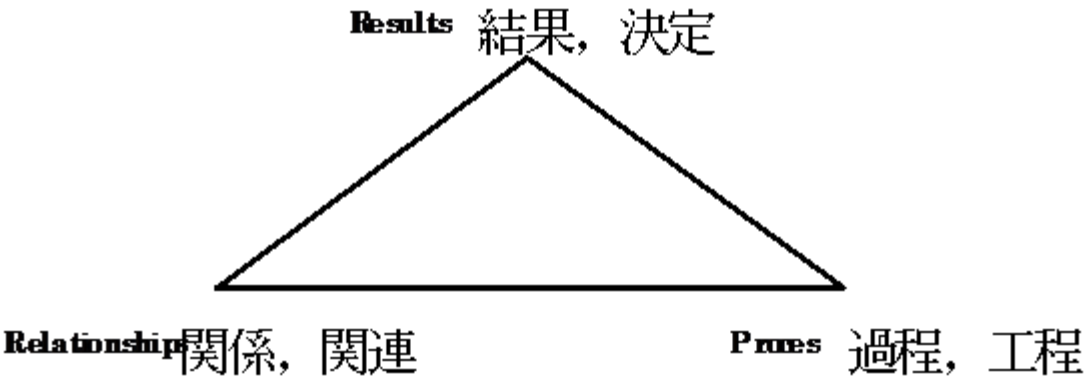
民間-　民間施設、民間ネットワーク、セキュリテー会社・・

一般のボランティア-　学校、会社・・

米国CARDの経験

CARD – Collaborating Agencies Responding to Disasters provides emergency preparedness and disaster response resources for nonprofits, faith organizations and community agencies serving our most vulnerable residents. If you’re looking to make preparedness fast, fun, fear-free and easy, CARD can help!

CARDの基本理念



共につくりあげていく協力関係

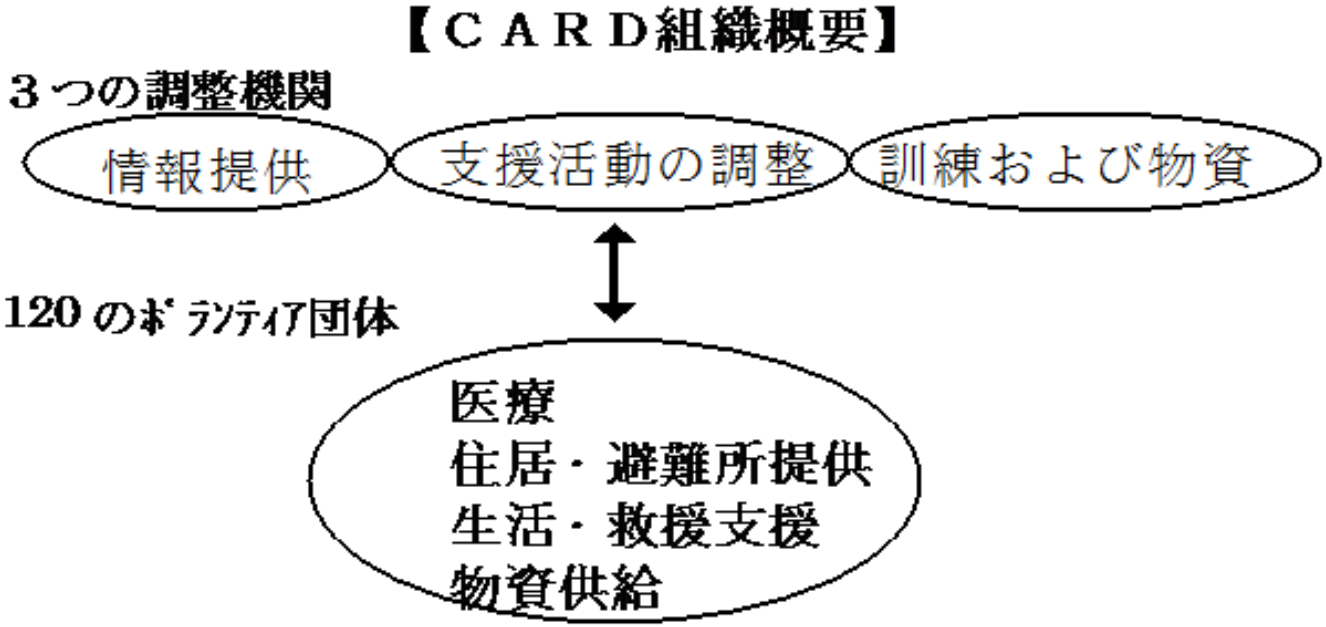
1．地域(末端）組織の意見を採り入れた計画づくり

2．地域社会に根ざした活動，地域主導型

↓

良い結果，成果が得られる

CARDの主な活動内容



対象者：障害者，高齢者，低所得者，未成年者，
移民，英語の出来ない人，エイズ患者など

CARDで対象となる人

1.災害以前から治療を受けている人

2.車いす利用者　　3.視覚障害者

4.聴覚障害者　　5.低所得者

6.ホームレス　　7.子供にいる家族や子供

8.老人　　9.薬物やアルコール問題者

10.英会話のできない移民の人たち　など

CARDから学ぶ点

①特別な扱いが必要なグループのニーズに見合う備え

②避難所に必要とされる独特の管理体制

③各組織における役割への理解と災害対応に対する日常時からの訓練

④“システムの破壊”に対処する備え

⑤主要な組織（知名度の高い）に集約した義援金活動

⑥活動資金の調達が遅いことを想定し，対応できるような備え

⑦システムを動かす全員の間の意志疎通と統率が，準備，対応，救援，復興，全ての段階で必要

日本福祉のまちづくり学会の役割

1.高齢者・障害者等の調査研究活動- 発災、避難、安否、避難生活、在宅生活、復旧、復興、救援システム、情報、物資など　これらの研究は等学会の責務

2.その他弱者に関する調査研究-外国人、知的・精神障がい者、子供、軽度な障がい者

3.これらに関する提案提言活動

4.復興まちづくりへの協力

4.災害からみた平時のまちづくり、平時の連携研究

5. 既往諸研究の再評価と再検討-片田敏孝教授(群馬大)など

障害当事者、ハード(まちづくり・土木・建築・造園)、リハビリテーション、医療・保健、福祉、人間工学、情報、教育・・が連携した組織は本学会のみである。